

心理・文化学科 主要科目の特長

【心理学概論】

心理学の基礎をできるだけ広範囲に学ぶことが目的である。まず、心理学の諸領域と歴史的背景、研究方法について学ぶ。その後、行動の生物学的側面、行動の変容や知識獲得に関する学習の側面、ストレスと情動、知覚と感覚、認知、記憶と忘却、パーソナリティの形成と知能、臨床心理学の基礎など、歴史的背景に触れながら理論的変遷も含めて学ぶ。心を科学的視点から捉えた心理学の基礎内容を理解できるようになり、人間の行動に影響を与える要素について説明できるようになる。

【心理学実験Ⅰ】

心理学実験実習Ⅰでは、知覚、運動、学習、記憶、行動に関する基本的な実験を行い、様々な心理学の測定法について学習する。具体的には、各テーマの担当者の指導の下、小グループで実験実習を行い、テーマ毎に、内容説明、実験の実施が行われる。また、心理学実験のすすめ方（教示の実際）、データ整理や資料収集・整理・結果の解析、研究書の作成、研究上のモラル・倫理の問題等を、実践を通して学習する。

【心理演習】

心理療法には多様な理論と方法があるが、本授業では、実際の援助場面で活用頻度が高い心理療法の基本的な技法を学ぶ。基礎となる積極的傾聴、描画療法、認知療法、箱庭療法などを演習形式で体験的に学習する。学校・病院・産業・福祉などの臨床現場のみでなく、社会人としてのコミュニケーション・スキルとして知識を身につけ、活用できることを狙う。

【知覚・認知心理学Ⅱ（認知心理学）】

知覚・認知心理学Ⅱ（認知心理学）では、ひとの認知機能に関わるテーマについて基礎的、応用的観点から議論する。テーマとしては、注意、記憶、思考を始めとして、感情との関わりや加齢による影響などの関わりについて考察し、その問題の所在や支援をするための可能性について検討する。単なる専門的な知識を獲得するだけでなく、教育や産業においてどのように知識を活用するかについて学ぶことを目指す。

【健康・医療心理学】

健康・医療心理学では、人間の心身に関する問題を総合的に扱う。「健康」や「ストレス」の概念と、ストレスが心身に与える影響と必要な対処に加え、身近な心身の疾病に対する適切な対応につながる知識を身につけるため、がんやうつ病についての症状や診断基準などを説明する。さらに、医療現場における心理社会的課題及び必要な支援や、保健活動が行われる現場における心理社会的課題及び必要な支援、災害時等に必要な心理に関する支援について概説する。

【国語科教育法Ⅰ～Ⅳ】

国語科教員に必要な国語の知識、授業力、コミュニケーション能力等を身に付けることを目的としている。国語科教員として理解しておくべき、国語の授業の知識や技術（発問、板書、発声や話し方・聴き方、机間指導、授業の組み立て等）について、模擬授業等を通して育成する。また、新学習指導要領国語編及び解説の記載事項を踏まえて国語科教育の意義と目的、内容等について理解し、国語科教員としての資質・能力の向上を図る。

【日本語文法】

この授業では、中高で学習した国文法（学校文法）をより深く理解するため、その成り立ちやしくみ、問題点を学ぶ。また、学校文法への理解を深める中で、日本語のしくみや変化についての知識を身に付けることを目的としている。また、授業では身に付けた知識を活用して、中高生が文法を学ぶ際に活用できる教材作成も行う。教材作成は数人のグループで実施しており、この活動を通して、学校文法に関する知識の定着を図るとともにコミュニケーション力や課題解決力を身に付けることを目的としている。

【日本古典文学】

この講義では、神話を読むことを通して古典文学の読解のみならず、古典文学作品の背景にある文化・思想・歴史を学ぶ。神話は、現代に至るまでその姿を変えながら私たちの周りに存在し続けている。さまざまな作品に見出すことができるそれらの神話を一つ一つ丁寧に読んでいくことで、古典を原典で読み解いていく力を涵養する。そして、その力を基盤にして日本における神話の内容を理解し、神話の展開と機能、ひいては日本の文化・思想・歴史について説明できるようになることを目指す。

【日本近現代文学史】

文豪たちの作品の中には、今を生きる私たちにつながる問題意識を見出すことができる。この講義では、近現代の主要な作家と作品を取り上げ、時代ごとの文体や人間描写の技法の変遷を理解する。また、明治の近代化の中で日本人が西洋の思想に向き合い格闘した歴史や、第二次世界大戦を経て価値観やメディアが多様化する様相を、作家の生涯や文学作品を通して具体的に学び、時間的・空間的な拡がりの中で個々の作品の文学史的意義を評価できる視点を涵養する。

【楷書法Ⅱ】

国語・書道コースの書道に関する講座のなかで、創作に重点を置く最初の講義である。楷書法Ⅰにおいて古典に対し緻密な分析と臨書を行いながら、学書方法と楷書の基本的な技術を習得した上で、確かな創作力を養成する。本講義で学習した創作方法の基礎を、他の書体における創作にも応用できることを視野にいれ、書道教員また書のスペシャリストとしての技術力の更なる定着も目指している。

【文化文芸概論】

現代社会における文化文芸の意義を考えることによって、地域や国際社会へ視野を広げることができる。具体的には、伝統から近現代まで、世界から日本、地域の文化文芸についてその発展と魅力を概観し、現代社会における文化文芸の位置を考えて行く。また、文化と経済に関する現状を理解し、動向を含め、それと関わる職業も含め概説する。学びを通して、文学や芸術の歴史から流通、メディアとの関係を説明でき、社会を批評できる力を育成する。

【日本文学概論】

小説を読むことによって得られる喜びや感動は、何によって形成されるのだろうか。この講義では、作品の構成、主題、表現など、文学研究の基本となる知識を学び、文学作品を読み解く力を身につけることを目的とする。また、近現代の代表的な女性作家の作品本文を取り上げ、小説の文体や主題が、その背景にある時代や社会によって生み出されていることを理解し、文学作品を通して人間や人生を捉える視点を養っていく。

【生活の中の書】

私たちの周辺において、書はさまざまな形で見ることができる。本授業では、生活の中の書を再確認し、その意義や効用について考えていく。習慣的な書式を理解するとともに、効果的な書体や書き方で文字を書く活動をとおして、実社会・実生活で役立つ「書く力」と想像力を養う。書の表現を自ら工夫・体験することで、日常における書字活動への興味・関心を高めることを目指す。

【メディアと現代文化】

比較文学・比較文化研究における文学理論、メディア研究を取り上げる。文学理論とは、主に現代思想（実存主義、構造主義、ポスト構造主義）を用いて文学を読む方法論のことである。アメリカやフランス、日本では、1980年代にポストモダン思想が流行すると、文学批評や文化研究、絵画、建築といった幅広い学問分野に影響を与えた。前半の回ではポストモダン以後の文学理論、メディア研究について講義を行い、後半の回ではアメリカのポストモダン作家ポール・オースター（Paul Auster, 1947-）のメディア越境的なテキスト分析を行う。

【日本近現代文学】

本講義では、批評理論（Critical Theory）や文化研究（Cultural Studies）などの新しい学際的な視座から日本近現代文学史を取り上げて講義を行う。具体的には、夏目漱石（1867-1916）から多和田葉子（1960-）に至る作家の文学作品を、批評理論や視聴覚メディア（Audiovisual Media）といった視座から読んでいく。また、文学テキストのみならず、批評理論に関する入門書や安部公房（1924-1993）の小説の英語訳など、多様なディシプリンやメディア、ジャンルを横断する知の在り方を吟味する。